



中高生とともに差別と闘う

『世界が少し明るくなった』

吉成タダシ (うずしおブランチ代表)



歩み止めることなく

前号で紹介した「ふるさと」つながりで一つ。

人権を語り合う中学生交流集会の後日のこと。ある人権フォーラムで、人権作文「想いを受け継いで」を発表していた映像と、彼のおじいさんが三十年前に歌った「二十五小節のふるさと」の音声を紹介させていただきました。音源は三十年前のものですが、まったく色褪せてはいませんでした。

こんなふうにして、人権文化は年月を重ねながら、世代を越えて染み込んでいくということ。いつべんにたくさんでなくてもいい。少しずつでも、歩みを止めないこと。派手なことでもなくていい。地味でも、歩み続けること。そのあとに、道ができていくのだということを、この家族を通じて伝えさせていただきました。実は、そのフォーラムには、彼のおじいさんも来られていて、直接お目にかかり、ごあいさつすることもできました。

ところでみなさんは、賀川豊彦をご存じでしょうか。社会運動家で、世界平和を求めた活動が高く評価され、一九五五年にはノーベル平和賞候補にもなった人物です。

ある日、地元にある賀川豊彦記念館を訪れていたときのこと。声をかけてくる館の方がおられました。よくよく見ると、なんと彼のおじいさん！驚きと感動で言葉を失いました。聞くと、館のガイドボランティア

アをしているとのこと。三十年を経てもなお、自分にできることを求めて活動されている姿に脱帽しました。きつとお孫さんも、この先、歩みを止めることなく、自分にできることを追い求めていくのだと思います。

『世界が少し明るくなった』

三本目の人権作文発表は、「哲ちゃん生き方をまなんで変わったこと」と。「哲ちゃんって誰？」って感じですよ。その発表の冒頭、発表者の女の子はこう述べました。

「私は、自分が大嫌いです。性格も容姿も、全てが嫌いです。」

「なぜ……？」と思わせるような人権作文の始まり。思うように、うまく自分の思いを伝え、表現することが苦手な自分が嫌いだということから、「まるで世界が少し明るくなった」というのです。そうやって、自分を突き動かしてくれた、哲ちゃんの詩、「おじぎ草」を紹介してくれました。

「おじぎ草」

夏空を震わせて

白樺の幹に鳴く蝉に

おじぎ草がおじぎする

包帯を巻いた指で

おじぎ草に触れると

おじぎ草がおじぎする

指を奪った『らい』に

指のない手を合わせて

おじぎ草のように

おじぎした

*

十七歳からハンセン病療養所で過ごした作者の桜井哲夫さん。彼の言葉を引用しながら、自分が変わった経緯について話してくれました。

「俺はね、自分の顔に誇りを持つてるの。この顔には、苦しみや悲しみがいっぱい刻まれてるのね。またそれを乗り越えてきたという自信も刻まれてるの。だからね、崩れちゃってはいるんだけど、いい顔なんじゃないかな。だってこの味わいは、俺にしか出せないものでしょ。」

ハンセン病を発症し、思うような人生を描くことができず、後遺症もあらわになり、他人から見ると決して幸せとは言えない人生であるにもかかわらず、そこに悲壮感はなく、むしろ人生を謳歌でもしたかのようにな哲ちゃんの言葉に、こう思ったと言います。

「私はこれからも、何かを目指して今の自分を嫌いになったりすると思うけれど、バリアを張って仮面をかぶったままでないくても、ありのままの自分であるのでもいいのかなと思うことができました。」

自信がなく、自分のことが嫌いだっただけで、それが、哲ちゃんの詩や人物像にふれることで、「世界が少し明るくなった」のだそうです。

取り込んでいく人権学習

そして最後には、「自分を知り、ありのままの自分でいたいと思える

ようになりました。そして、哲ちゃんが「らい」に感謝したように、私の周りにいてくれるすべての人たち、私をつくってくれたすべてのできごとに対して、感謝の気持ちを忘れず過ごしていきたいです。」と締めくくりました。

発表を聞き終えた私は、「何て素敵な感性をした子なんだろう」と思うと同時に、自分もこの詩や哲ちゃんに出会えて良かったなあと思えました。そんなふう感じた人は他にもいたのではないかと思います。

世の中には様々な差別があり、人権課題があります。その一つ一つを知ることは大事ですが、その上つ面を知るだけでは、本当に知っているとは言えません。同情や哀れみにとどまり、差別者にすらなりかねません。でもそれらを自分自身に落とし込んで、自分事として取り込んでいくことができれば、「差別はあつてはいけないけど、この差別問題に出会うことができたら良かった。自分が「変わった」と思えるのだと思います。人権学習が、そんな学びになっていけばと思います。

自分には自分の学びがありますが、他の人には他の人の学びがあります。自分一人ですべてを学びとすることはできません。自分がしていない学びを他の人から学ぶことで、新たな発見や気づきを得ることがあります。そんな出会いがいろんなところに生まれていくといいなと思います。

(次号に続く)